

2024年7月 CC-UK 視察報告書

～英国におけるコンパッションのまちづくり～



報告者 竹之内裕文（静岡大学）

背景

報告者は CC-UK (Compassionate Communities UK) の 2024 年次大会にゲスト講師として招待された¹——2023 年度の年次大会に招待されていたが、新型コロナウイルスの影響が長引き、英国の医療・福祉従事者が疲弊していたため、同大会は中止された。せっかくの渡英の機会なので、年次大会に参加するだけでなく、CC-UK のコンパッション都市・コミュニティを視察することにした。CC-UK 理事のエマ・ホッジス氏 (Dr. Emma Hodges) から紹介を受けて、コンパッションコミュニティ Brereton & Ravenhill とコンパッション都市 Birmingham を、さらに Community Hospice in Greenwich & Bexley を訪問することになった。

目的

報告者は、訳書『コンパッション都市』(アラン・ケレハー著、竹之内裕文・堀田聰子監訳、慶應義塾大学出版会、2022 年) の刊行の前後から、コンパッション都市・コミュニティの理論・実践活動に従事してきた。実践面についていえば、2022 年 1 月から、西伊豆の松崎町でまちづくりアドバイザーを務め、第 6 次総合計画 (2023-32 年度) の策定に協力し、「コンパッションタウン松崎」を実現すべく、現在も活動を続けている。また CC-UK と並び立つ全国規模のネットワークを築くべく、コンパッション&ダイアログという団体を立ち上げ、本格的な活動に着手したところである。これらの活動を前進させるために必要となる学びを得るため、今回の視察は企画された。

視察メンバー

視察には報告者のほか、団体コンパッション&ダイアログのメンバー (老年看護学研究者)、報告者が主宰する死生学カフェのメンバー、報告者の指導学生 (静岡大学哲学研究室²所属の大学院生) が同行した。



¹ <https://compassionate-communitiesuk.com/conference2024/> (2025 年 1 月 19 日閲覧)

² <https://www.shizuoka.ac.jp/philosophy/> (2025 年 1 月 19 日閲覧)

スケジュール

視察のスケジュールは、以下の通りである。

6月30日	ロンドン・ヒースロー空港到着 コミュニティホスピス・グリニッジ&ベクスリー訪問
7月1日	CC-UK2024 年次大会開催地（Rugeley Town）へ移動 National Memorial Arboretum in Rugeley を散策後、ディナーパーティに参加
7月2日	CC-UK 年次大会 1 日目
7月3日	CC-UK 年次大会 2 日目
7月4日	コンパッションコミュニティ・ブレアトン視察
7月5日	コンパッション都市・バーミンガム視察
7月6日	スコットランド移動
7月7日	グラスゴー大学研究者と研究打ち合わせ
7月8日	ロンドンへ移動
7月9日	ロンドン・ヒースロー空港出発

報告

ここでは以下の 4 つの視察をとりあげ、視察先の概況と視察を通しての学びを報告する。

1. コミュニティホスピス訪問（6月30日）

訪問先のホスピス Community Hospice in Greenwich & Bexley は、ロンドン東部に位置し、その名称の通り、グリニッジとベクスリーという 2 つの行政区をカバーするコミュニティホスピスである。

このコミュニティホスピスの沿革は次の通りである。1985 年、がんを患う二人の友人、パット・ジャバンズ



（Pat Jeavons）とドン・スターロック（Don Sturrock）がグリニッジとベクスリーの住民のためにホスピスを設立しようと志す。二人は「1ポンドをだしてほしい」（Give us a Quid）という資金集めの運動を始め、やがて生活協同組合（Co-

op)を通じて、破格の価格で土地を購入する。1992年、その土地に建物が建造され、1994年にホスピスが開設される。

セント・ジョセフやセント・クリストファーズに代表されるように、英国のホスピスの多くは、キリスト教会（カトリック教会ないし英国教会）から資金援助を受けて創設されている。それに対して当ホスピスの主たる財源はコミュニティメンバーからの寄付にあり、この点に最大の特徴がある。それに応じて当ホスピスは、コミュニティとのパートナーシップを重視し、評議会（board of trustees）は地区住民により構成される。またキリスト教系のホスピスと比べて、宗教色がかなり希薄である。この点も施設見学を通して確認することができた。

私たちの視察には、パートナーシップ担当理事のジョン・デヴリン（Dr. Jon Devlin）とCEOのケイト・ヒープス（Kate Heaps）が応対してくれた。二人にそれぞれ約1時間ずつインタビューし、当ホスピスの現状と課題について話を伺った。それを通して浮かび上がった課題のひとつは、資金調達とボランティア



の確保である。CEOのケイトはNHSなどで約25年間、ボランティアコーディネーターとしての経験を積んできた。また当ホスピスには、4名の資金調達担当者がいるという。とはいえ資金調達とボランティアの確保は、他の多くのホスピスにも共通する課題だといってよいだろう。

もうひとつ、立地にかかわる当ホスピス特有のミッションも明らかにされた。グリニッジは由緒ある天文台と風光明媚なウォーターフロントで知られ、比較的富裕な居住者が多い。対してベクスリーには、多民族の住民が居住し、生活レベルも決して高いとはいえない。当ホスピスは、対照的なこの両地区を股にかけて、文字通りに多様な住民を対象に、ホスピス内外での多種のケア・サポートプログラムを提供している。当ホスピスのウェブサイトでは、そのミッションが次のように表明される³。

驚くほど多様性に満ちた私たちのコミュニティに属するすべての人が自分たちの価値観や信念、ライフスタイルに応じた仕方で死へアプローチできるこ

³ <https://communityhospice.org.uk/>（2025年1月19日閲覧）

とを、私たちは願っています。

疼痛マネジメント、在宅ケア、リハビリ支援、パストラルサービス、ホスピスでのエンドオブライフケアのいずれを通して、私たちは、終末期疾患とともに生きるすべての人、その愛する人たちやケアラーを手助けする用意があります。昼夜を問わず、ケアやサポート、助言を無償で提供します。

グリニッジとベクスリーの人びとのため、私たちはここにいるのです。

ジョンとケイトとの面談に続いて、「コンパッションに満ちた隣人たち」(Compassionate Neighbours) と呼ばれる 4 名のボランティアと面会した。「コンパッションに満ちた隣人たち」のプログラムは、コンパッションコミュニティのホスピス・バージョンと位置づけてよい。現に「コンパッションに満ちた隣人たち」のウェブサイトでは、「コンパッションコミュニティは、よい隣人たちとともに始まる」という洞察とともに、「人びとの力を結集して、コンパッションに満ちた、ケアし合うコミュニティを築く」というミッションが掲げられる⁴。

このプログラムは2006年にセント・ジョセフで始動した⁵。現在はロンドンを中心に、14のホスピスで展開されている。当ホスピスもこのプログラムに参画しているのだ。コミュニティのうちには、高齢や独居ゆえ、あるいは慢性疾患や終末期疾患を抱えるため、社会的に孤立している住民が少なくない。その一人ひとりを定期的に訪問し、話を聴いて、気持ちを支える、あるいは一人ひとりが抱く願いが実現されるように手助けする、それがコンパッションに満ちた隣人たちの役まわりだ。その活動を通して、見知らぬ住民のあいだに交友関係が生まれ、コミュニティのネットワークが築かれるのだ。

当ホスピスの 4 名のコンパッションに満ちた隣人たちは、各々の経験を語ってくれた。平均して週 1 時間ほど、地域の住民を訪問して、話を聴いたり、外出の手伝いをしたりしているそうだ。それを通してコミュニティのネットワークは確実に広がっているという。

コミュニティホスピスの視察を通して、報告者はホスピスの別の側面にふれるとともに、コンパッションコミュニティとの密接な関係を再確認することができた。

2. CC-UK2024 年次大会参加 (7 月 2-3 日)

CC-UK の 2024 年度年次大会は 7 月 2 日と 3 日の両日、ルージリー

⁴ <https://compassionateneighbours.org/> (2025 年 1 月 19 日閲覧)

⁵ 報告者は 2019 年にセント・ジョセフとセント・クリストファーズを訪問し、コンパッションに満ちた隣人たちと面談した。これについては巻末の参考資料 2 (267-275 頁) を参照されたい。

(Rugeley) の Lee Hall Club を会場に開催された。英国各地から、また英語圏を中心に世界から、120名の参加者が集まった。プログラムは以下の通りである。

第1日

8.45 - 9.30	受付
9.30 - 10.15	基調講演①「コンパッション都市 あらゆることを、どこでも、直ちに」(Prof. Allan Kellehear: Compassionate Cities, Everything Everywhere All at Once)
10.15- 11.00	対談①「ブレアトンと松崎コンパッションコミュニティへの二つのアプローチ」(Sue Merrimen and Prof. Hirobumi Takenouchi with Julian Abel)
11.00- 11:20	休憩
11.20 - 12.20	コンパッション都市・コミュニティのプログラムを巡るワールドカフェ
12.20 - 13.20	ラウンドテーブル① Chantal, St Elizabeths, Caroline Mogan
13.20 - 14.30	ランチとネットワーキング
14.30- 15:15	基調講演② Mark Hazlewood
15.15- 16.00	電子データ交換 (DDI) ~草の根的な活動の紹介
16:00- 16:15	休憩
16:15- 17.00	ラウンドテーブル② St Michaels, Alex Wray, Jennie Morgan
17.00	ふり返し、交流会場への移動

第2日

8.30 - 8.45	大会2日目への歓迎
8.45 - 9.30	基調講演③「ウブントゥとコンパッションコミュニティ」(Dr Christian Ntizimira)
9.30 - 10.30	グローバル・パネル「コンパッションのベスト・プラクティス」(Dr Naheed Dosani, Dr Christian Ntizimira, Dr Kerrie Noonan, Prof. Hirobumi Takenouchi, Jennie Morgan, Camilla Ronderos)
10.30 - 10.50	休憩
10.50 - 11.50	対談② Samantha Barlow BEM, Founder & Chief Officer,

	Fitmums and Friends, Colette Scarborough-Jelfs from Widowed and Young and Madeline Bracken with Amy McKeowan)
11.50 - 12.30	ラウンドテーブル③ Jenny Marshall, Mid & East Antrim Agewell Partnership, EOLC Doulas, Compassionate Neighbours
12.30 - 1.45	ランチ
1.45 - 2.30	対談③ Camilla, Trucanta and Karrie Marshall
2.30 - 3.30	基調講演④「デス・リテラシー・インデックスについて」(Kerrie Noonan)
3.30 - 16.00	ネットワーキングとグループ対話
16.00 - 16.15	閉会～ふり返りとフィードバック

基調講演①は大会の最大のハイライトであり、コンパッション都市・コミュニティへの格好の導入となると思われる。せっかくの機会なので、そのエッセンスを日本語で記録しておくことにしよう。そのうえで、年次大会全体をふり返り、得られた気づきと着想を記す。

アラン・ケレハーの基調講演

アラン・ケレハーはコンパッション都市・コミュニティ運動のパイオニアであり、その理論構築と実践展開を主導するリーダーである。彼の略歴については、巻末の参考資料 4 所収の監訳者解説（297-301 頁）を参照いただきたい。

アランの語り口は情熱的だが、この日はとりわけ情熱的だった。また気心の知れた CC-UK の仲間たちに囲まれて、リラックスしているように見えた。

静寂のなかから、アランが最初の言葉を発する——「私たちはなんのために活動しているのか、なぜ今日ここに集まっているのか、その理由を思い起こすことが大切だ」。

続けて彼は、大学生時代の読書体験をふり返る。E. キュブラー・ロスの『死ぬ瞬間』(On Death and Dying) を読んだとき、大きな違和感を抱いたというのだ。同書で描き出される「死」は病院での出来事である。そしてそこにはアメリカの個人主義・心理学主義的な「死」の理解が刻印されている。

アランは「グリーフ」の経験をとらえ、彼の理解を言葉にする——「目を閉じれば、そこに故人がいつでも共にいる。それが私にとってのグリーフの経験だ」。私たちはグリーフを通じて、その都度、死者と出会いなおす。グリーフは

永続し、その経験が私たちのあり方を変えるのだ。遺族はしばしば、社会に対して献身的なはたらきをする。その事実がグリーフの力を雄弁に物語っている。グリーフには、生きる意味を与え、継承を可能にし、共感とコンパッションを生み出す力があるのだ⁶。

「グリーフ」と「死別」という言葉から、私たちはしばしば「恐れ」と「涙」を連想する。「死」という言葉からは、「崩壊と葛藤」を想起する。これらのイメージは、さまざまなメディアを通して、私たちに植えつけられたものだ。一例として、シャーウィン・B. ヌーランドの『私たちの死に方 人生の最終章への省察』⁷を見てみよう。そこでは悲惨な吐血のシーンが描写され、それによって読者は恐怖を植えつけられる。「死」は生からの逸脱・脱線と捉えられ、それに対するコントロールの意義が強調される。

しかし私たちは、こうしたイメージを超えて歩むことができるし、現に歩んでいる。私たちの多くは、今、このとき、苦悩と困難を抱えている。口には出さないけど、痛みを抱えているかもしれない。大切なひとを喪うと、毎朝起きるのにさえ、途方もないガッツが要る。死にゆくひと、ケアするひとの多くも、毎日、勇気を示している。恐怖のあるところには、勇気もまたあるのだ。喪失の経験からは、親密さや愛、希望が生まれる。そのような時に必要なもの、それは心理力カウンセリングではなく、具体的なサポートである。

死に面して、グリーフの渦中であって、世界は異なった様相にもとに立ち現れる。いつもの樹、笑顔、怒った顔、犬や馬の顔、空が違って見える。故人の訪問（お迎え）もあるだろう。それともに物語は語りなおされる。怒り（批判）や悲しみにも意義がある。それらは変化を生み出すのだから。この世界を旅立つ準備の時間は、遺されるひとたちへのプレゼントになる。私たちは、これらのプロセスにも関与し、サポートの手を差し伸べることができるのだ。

死にゆくという経験、ケアするという経験、グリーフの経験は、互いに密接に結びついている。そしてここに、コンパッションの相互性が見てとられる。

- 死にゆくひとは日々、[大切なものを失い] グリーフを経験している。
- 死にゆくひとは日々、[周囲のひとやものを] ケアしている。
- ケアするひとは日々、[大切なものを失い] グリーフを経験している。
- ケアするひとは日々、死へ向かって少しずつ歩んでいる。

⁶ 共感とコンパッションの関係については、参考資料 5 を参照されたい。

⁷ Sherwin B. Nuland, How We Die: Reflections on Life's Final Chapter, New Edition, Vintage, 1995.

- 死別経験者は日々、グリーフを経験している。
- 死別経験者は日々、死へ向かって少しずつ歩んでいる。

T.S.エリオットの表現を借りれば、「わたしたちは、死にゆくひととともに死ぬ。ほら、かれらは旅立つ、そしてわたしたちはかれらとともにいく」のだ⁸。

「これしかない」と、「唯一のもの」にしがみつくと必要はない。「無二の物語」など存在しない。物語は別様に語られるし、その都度、新たに語られる。「これこそが無二の友人、医師、チャプレン、ボランティアだ」と、思いこむ必要もない。友人はほかにもいるはずだし、新たな交友関係も生まれるだろう。医師、チャプレン、ボランティアも、けっして無二ではない。「ただ一度の好機」などと思わなくていい。かりにそれを逃したとしても、いくらでも、やり直しがきく。あるいは、時機はまだ到来していないかもしれない。「ただひとつの理由」というのも、おそらく思いこみの産物だ。理由というものは複数ある。もしかしたら理由などないのかもしれない。

死にゆくひと、ケアするひと、グリーフを抱えるひとのいるところ、いつでも、どこでも、私たちは居合わせる必要がある——隣近所に、職場や学校に。あるいはそれはサッカーチームかもしれないし、ショッピングモールやテレビ番組かもしれない。それを通して「あらゆることが、どこでも、直ちに」(Everything, everywhere, all at once) 立ち現れるのだ。これこそコンパッションコミュニティの考え方だ。私たちはなんのために活動しているのかという問いの答えは、ここにある。コミュニティには具体的なアクションが求められており、個人とグループはその責任を負っている。では、いったいどうやってこれを実現するのか。それを学び合うため、私たちは今日、ここに集まっているのだ。

死にゆくひとは、死んでいない。かれらは生き、ケアを提供している。グリーフ・喪失とともに生きるひとは、「患者」ではない。かれらは語るべきことを、私たちが聴くべきことをもっている。グリーフと喪失を知らないひとは、かれらから教わったらよい。このように私たちは、互いに学び、互いにサポートし、相互にケアする。これこそがコンパッションである。だからこそ私たちはコンパッションコミュニティを必要とするのだ。

専門職としてできることには限界がある。専門職のはたらきが重要でないといっているのではない。それは重要である。しかし、すべてのものには制約があ

⁸ これは第二次世界大戦中（1941年）に出版された詩集『四つの四重奏』所収の「リトル・ギディング」(Little Gidding) という詩からの一節である。この一節には、「わたしたちは、死者とともに生まれる。ほら、かれらが戻ってくる。そしてかれらとともに、わたしたちを連れてくる。」という詩句が続く。T. S. Elliot, *Four Quartets*, Faber & Faber, 2010.

る。専門職にも限界があり、だからこそ適正なポジションへの再配置が求められるのだ。

専門職依存を脱するためには、死と喪失に関する知・技を底上げする必要がある。それは互いに聴きあい、学びあうことから始まる。そこで生き、死んでいきたいと思えるコミュニティを、私たちの手で、共に創り出そうではないか。それを通してあらゆることが、いたるところで、一挙に立ち現れるだろう。

第1日のプログラム終了後、私たちは交流会に参加し、郊外でバーベキューを楽しんだ。その席で、アランと2時間ほど語り合う機会に恵まれた。

日本社会でコンパッション都市・コミュニティの運動を広げていくために、どのように活動を進めたらよいのか。とりわけ創設へ向けた準備を重ねている団体「コンパッション&ダイアログ」をどのように組織したらよいのか。これらの問いかけに対してアランは、一つひとつ丁寧に回答してくれた。

第一に、ストーリーテリング（story telling）の導入を提案した。日本は多様な神話、昔話、民話の宝庫である。これらを題材に、喪失と死について学びあうことができるというのだ。たしかに日本各地の神話、昔話、民話を共に読み、それを題材に対話したら、喪失と死について深く学ぶ機会となるだろうし、参加者から多くの語り（ストーリー）が引き出されるだろう。また第二に、アランは専門職の再教育（トレーニング）の意義を強調した。「健康増進」（health promotion）をテーマとする本には、コミュニティに関する章が必ずあるから、それらを題材に公共教育、政策立案、社会生態学などについて学んだらよいと提案した。たしかにそのような学びを積んでコミュニティへ出たならば、専門職はコミュニティに根ざした実践を展開することができるだろう。最後に、彼はコンパッション&ダイアログの設立についても、具体的なロードマップ案を示してくれた。

アランとの対話を通して、報告者は2つの着想を得た。ひとつは CC フェスティバルの開催である。年に一度、喪失と死の当事者、エンドオブライフ専門職、パブリックヘルス関係者、コミュニティ・ソーシャルワーカーが集まり、対話を通して互いの語り（ストーリー）と実践から学びあうのだ。物語・絵本・詩・音楽・演劇などのアートも導入し、楽しみながら学びを深められたら素晴らしい。

CC-UK 年次大会のプログラムは、講演やシンポジウム・パネルが大半を占



め、参加者がフラットに対話する機会が乏しい。さまざまに工夫が凝らされていたものの、なお学会の色彩が濃い。私たちは学会ではなくフェスティバルを開催しよう。多様な参加者が一堂に会し、対話とアートを通して喪失と死を学びあう場を創り出そう。そのような構想が膨らんだ。

もうひとつには、東アジアの CC ネットワークを築くというアイデアが得られた。日本だけでなく、東アジア諸国の神話、昔話、民話を収集し、それを題材に対話したら、どれほど豊かで楽しいだろう。またそれを通して東アジア・日本におけるコンパッションの系譜を掘り起こすことができるだろう。

CC-UK の 2024 年度年次大会には、世界から参加者が見られたが、その大半は英国、米国、カナダ、オーストラリアなどの英語圏諸国である。また参加者の大部分は専門職である。このような大会の光景は、東アジアで CC ネットワークを構築する意義を照らし出した。

3. プレアトン・ラーベンヒル視察（7月4日）

プレアトン・ラーベンヒル（Brereton & Ravenhill）はコンパッション都市憲章⁹の条件を満たすと評価され、2021 年 9 月に CC-UK 最初のコンパッションコミュニティと認定された。それは COVID-19（新型コロナウイルス感染症）がなお蔓延していた時期にあたる。

英国では 2020 年 3 月から 21 年 7 月までロックダウンの施策がとられた。外出制限や自己隔離が規制され、非必需品の小売店や美容院、ジムやプールなどの運動施設、パブやバーなどの飲食店が休業を命じられた。クリスマス期の家族や友人との交流も禁止された。それによって多くの人びとが社会的孤立と孤独に苛まれた。2020 年 12 月に実施された英国心理学会（BPS）の調査によれば、身内や友人がクリスマス期に孤立することを心配しているという回答が 40%を占めた¹⁰。とりわけ 350 万人を超える独居高齢者は、深刻な打撃を受けた¹¹。

こうした状況のなか、プレアトン・ラーベンヒル地区では、1 人のコミュニティワーカー（Community Development Worker）がアクションを起こす。CC-UK 2024 年次大会の対談①に登壇したスー・メレメン（Sue Merrimen）その人である。彼女と仲間のボランティアたちは、約 2800 戸を数える¹²すべての

⁹ <https://compassionate-communitiesuk.com/compassionatecitycharter/>（2025 年 1 月 19 日閲覧）なお邦訳は参考資料 4 に付録（292-6 頁）として所収。

¹⁰ https://www.jlhc.org.uk/jp/ad_report/isolation/（2025 年 1 月 19 日閲覧）

¹¹ <https://www.campaigntoendloneliness.org/the-facts-on-loneliness/>（2025 年 1 月 19 日閲覧）

¹² https://www.nomisweb.co.uk/sources/census_2011_ks/report?compare=E04008869（2025 年 1 月 19 日閲覧）

世帯のドアを叩いた。一人ひとりの安否を確認し、ニーズを尋ね、助けの手を差し伸べたのである。

スーはブレアトン・ミリオン (Brereton Million¹³) という団体のコミュニティワーカーとして活動している。この団体はローカルトラスト¹⁴の助成 (Big Local) を受けて、2012年に設立された。



なぜロックダウンという状況のもと、コンパッションコミュニティは形成されたのか。それは住民たちが社会的なつながりを切望し、コミュニティの存在意義を痛感したからだ。それがコンパッションコミュニティを形成する原動力になったと、スーはふり返る。

事前のオンライン面談と CC-UK2024 年次大会の対談を通して、以上の経緯と背景を掌握したうえで、私たちは視察へ向かった。敷地へ足を踏み入れると、地区の会館がある。ブレアトン・ミリオンの拠点もここに置かれている。道路を挟んだ向かい側には、子どもたちの遊び場がある。



スーに案内されて、敷地を奥へ進むと、芝生の運動場がある。ここで私たち一行は専属のスポーツインストラクターと出会い、彼の指導のもとドッジボールに興じた。運動場の先には、屋外トレーニング施設がある。だれでも、いつでも利用できるように、屋外に設置されて



¹³ <https://www.breretonmillion.co.uk/> (2025年1月19日閲覧)

¹⁴ <https://localtrust.org.uk/> (2025年1月19日閲覧)

いるという。

敷地をさらに奥へ進むと、雑木林を縫うように散策路が整備されている。そこには多種の樹木が生い茂り、野生の果実も散見される。森林浴を楽しんだり、季節の果実を手にとったりしながら、住民たちはここで思い思いの時間を過ごすのだろう。



森を抜けると、広大な芝生のスペースへ出る。年に1回この場所で、映画鑑賞のイベントを開催するという。日中は子供のために映画を上映し、夕方から大人たちが映画を楽しむ。



敷地を周回して会館へ戻ると、手芸クラブ (craft club) のメンバーが集まっていた。会

は通常、毎週金曜日にかかれるが、私たちのためにわざわざ集まってくれたのだ。手作りの作品は、高齢者を中心に、必要とするひとたちに配付するという。「手芸」の会ではあるが、週に一回、お茶を飲みながら仲間とおしゃべりするのがなよりの楽しみだという。報告者は、手縫いのカーディガンをプレゼントされた。



会館を出ると、園芸クラブのメンバーたちが集まっていた。メンバーたちは好きな花や野菜を植えて育てているという。週 1-2 回、各々の都合に応じて通い、花や野菜の世話をしているという。



敷地から 10 分ほど歩くと、住民たちが自由に利用できるコミュニティハブ（プレハブ小屋）がある。私たちの訪問日が英国の総選挙と重なったため、その日は地区の投票所として使用されていた。

コミュニティハブの隣には、もうひとつプレハブ小屋があり、そこではコミュニティショップが営まれている。食料の生産から消費にいたる過程では、大量の余剰食品が発生する。このショップでは、再利用されなければ廃棄されてしまうそれらの食品を、必要とするひとに低価格で販売している。店舗には、缶詰やシリアル類だけでなく、デザートや野菜・果物などの食品が所狭しと並んでいる。

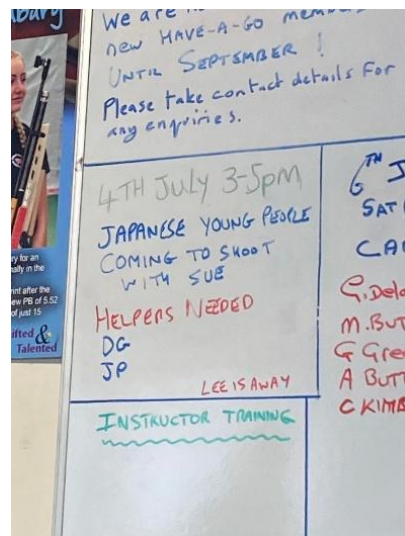
「これはフードバンクの一種か？」と尋ねたところ、ショップの担当者は次のように回答してくれた。生活困窮者が食べ物にアクセスできるようにするという目的は共通するが、フードバンクでは食料を「配給する」という色合いが濃く、食べ物を必要とするひとの「尊厳」が保たれない。だから食料を配給するのではなく、自ら買い物する機会を提供している。入会金として 2 ポンド支払い、月会費 5 ポンドを収めれば、だれでも、いつでも、コミュニティショップで買い物することができる。このショッ



ブは生活困窮者にかぎらず、さまざまな層の住民が利用している。さらに買い物だけでなく、料理教室を開き、生計維持や就労などの相談にも乗っているという。



最後に私たちは近隣のライフルクラブを訪れた。そこには学校帰りのティーンエイジャーたちが集まっていた。ライフルを試射し、居合わせた若者たちと交流した。同行したスーとエマは、日本と英国の若者たちが交流し育ちあう機会をつくりたいと、ビジョンを語ってくれた。



ブレアトン・ラーベンヒルのコミュニティには、だれでも集えるコミュニティの拠点がある。そこでは各々の年代や趣味に応じて、だれもが思いのまま過ごすことができる。スポーツ（サッカー、ドッジボール、トレーニング）を楽しんでもいいし、散策してもいい。園芸や手芸に精を出しながら、仲間とおしゃべりに興じることもできる。子どもたちのための公園もあるから、親子連れでも出かけられる。多世代の多様な住民がひとつの場所にとともに身をおき、それぞれの流儀で楽しむことができるのだ。

自分が所属するクラブに通うため、敷地へ足を踏み入れると、所属するクラブメンバーだけでなく、他の活動に従事する住民たちと出会う。同じ敷地で、ほかにどんな活動が行われているのかも、よく見える。現に手芸クラブのメンバーたちは、会館に出入りする途次、園芸クラブのメンバーや散策する人たちと出会い、会話を交わしていた。各人の個別性を尊重しながら、同時に、各クラブの枠を超えて、共同性が育まれるのだ。

ここへ行けば仲間たちに会えるという場所があるかないか、それがコンパッションコミュニティ形成の成否を握っているのではないか。手芸クラブのメンバーたちは、手芸そのものより、むしろ仲間とおしゃべりが楽しいと、率直に打ち明ける。安心してなんでも話せる居場所では、互いにケアし合う関係が築かれる。それは喪失と死の諸課題に共同で対処する足場となるだろう。

コンパッションコミュニティだからといって、必ずしも、別れ・死・老い・病気・孤立の苦しみや悲しみから出発する必要はない。むしろ安心して身を寄せられるコミュニティの拠点を用意することで、相互的なケア関係が築かれ、住民たちは課題を分かち合い、助け合うことができるようになる。コンパッションコミュニティはそのように立ち上がるのであり、その成長の過程で、欠けている要素を補完していけば、喪失と死を共に受けとめ、助けあうコミュニティに育っていくだろう。

報告者がまちづくりアドバイザーを務める松崎町では、2024年度から「まちのつなぎ役のための学び合い講座」を開催している。報告者は帰国後、月例の講座で、ブレアトン・ラーベンヒルでの学びを参加者と共有し、このようなコミュニティの拠点が松崎町にもあるかと問いかけた。現状では、このような場所は松崎町にはないが、あったらよいという声が上がった。これを受けて松崎町では、コミュニティの拠点を築く準備に着手したところである。

4. バーミンガム視察（7月5日）

ブレアトン・ラーベンヒルの住民たちとの別れを惜しみながら、私たち一行はローカル線に乗り込んだ。1時間余り乗車し、バーミンガム・ニューストリート駅に降り立った。

バーミンガムは 100 万の人口を有する——都市圏の人口は 260 万を超える——英国第 2 の大都市である。街を歩くとすぐに気づくように、多民族が暮らす多様性に満ちた都市である。バーミンガム大学をはじめ 7 つの大学を抱え、文化・アート活動が盛んである。

バーミンガムでは市議会の主導のもと、健康・幸福戦略（Health and Wellbeing Strategy¹⁵）や高齢者に優しいコミュニティ（Age-friendly Communities）¹⁶形成の政策が進められてきた。また NHS コミュニティ・トラストやメンタルヘルス・トラスト、複数の大規模病院やホスピス、多くのボランティア団体・組織が存在する。

2022 年 3 月、バーミンガムはコンパッション都市憲章の 13 の条件を満たすと評価され、CC-UK 最初のコンパッション都市として認定された。コンパッション都市を目指してから公式に認定を受けるまで、約 10 年を要したという¹⁷。アラン・ケレハーの著書（参考資料 4）や国際学会 PHPCI¹⁸からの影響のもと、また英国政府のエンドオブライフケア政策やホスピス UK のダイニング・マターズ運動（Dying Matters¹⁹）に連なるかたちで、コンパッション都市を実現する活動が緒に就いた。その過程で、バーミンガムには複数のコンパッションコミュニティが誕生し、2022 年のコンパッション都市認定にいたった。

5 日の午前 10 時、私たちは、カノン・ヒル公園内のミッドランド・アートセンターに到着する。事前にメールで指定された会場だ。理学療法士のスザンヌ・マカーサー(Suzanne McArthur)が入り口で待ち受け、カフェテリアへ案内してくれる。飲み物を注文した後、参加者の自己紹介が始まる。バーミンガムからの参加者は 7 名で、そのうちの 3 名がコンパッションコミュニティの活動について報告してくれるという。



1 人目の報告者はジェス・アレン（Jess Allen）だ。彼女はノースフィール

¹⁵ https://www.birmingham.gov.uk/info/50119/health_and_wellbeing_board/（2025 年 1 月 19 日閲覧）

¹⁶ <https://ageing-better.org.uk/>（2025 年 1 月 19 日閲覧）

¹⁷ https://ehospice.com/editorial_posts/from-aspiration-to-accreditation-growing-a-compassionate-city-by-emma-hodges-et-al/（2025 年 1 月 19 日閲覧）

¹⁸ <https://www.phpci.org/>（2025 年 1 月 19 日閲覧）

¹⁹ <https://www.hospiceuk.org/our-campaigns/dying-matters>（2025 年 1 月 19 日閲覧）

ド・コミュニティ・パートナーシップという慈善団体が管理者を務めている²⁰。この団体は、バーミンガムの南部に拠点を構え、雇用支援・斡旋や家計相談のほか、フードバンク事業など、コミュニティ支援活動を手広く展開している。家族支援にも力を入れており、「ノースフィールド・ビーチ」という家族向けの夏季プログラムを13年間、参加費無料で開催してきた。ビーチに連れ立って出かけ、アートや手芸、演劇、サーカス、演奏を楽しむ。恐竜も登場し、家族は夏休みの貴重な思い出をつくることができる²¹。



この日ジェスは、死と喪失のサポートプログラムを中心に紹介してくれた。バーミンガムでは、市議会が複数のトラストや教会、死別サポートグループなどと連携して、市内の複数の場所で死別サポートのプログラムを提供している。ノースフィールド地区では、ノースフィールド・コミュニティ・パートナーシップが中心となって、毎週水曜日の午前、バプテスト教会で、死別サポートグループを開催している。参加者が安心して語れる場となるように、しっかり聴いて理解することに重きがおかれている。

2人目の報告者、デビー・カーズレイク (Debbie Kerslake) は、ブルムヨド (BrumYODO) の委員会メンバーである²²。ブルムヨドはコミュニティ・インタレスト・カンパニー (Community Interest Company) と呼ばれるコミュニティ分野における社会的企業の一つである。この会社は「生と死という問題」(A Matter of Life and Death) というテーマのもと、死と死にゆくことについて考え、語り合うフェス

Bereavement Support Group

For anyone who has recently been bereaved or is still working through the death of someone a long time ago.

Sometimes the **help** we need is a place to **talk** with others who can **listen well** because they **understand** what it feels like.

A **safe place to talk** with others who have their own experience of bereavement—a place to make relationships where we can offer **understanding** and we can **support** one another.

Bereavement Support Group

Wednesdays @ Northfield Baptist Church: 10.30am - noon

First and third Wednesdays will have a structure and focus...

Second and fourth Wednesdays will be informal times for coffee and chat with others from the group...

If you - or anyone you know - is interested in joining the group please contact Nicky

ministers@northfieldbaptist.org.uk
07473388150



Supported by  NORTHFIELD
Community Partnership



²⁰ <https://www.northfieldcommunity.org/> (2025年1月19日閲覧)

²¹ <https://www.facebook.com/NorthfieldPship> (2025年1月19日閲覧)

²² <https://brumyodo.org.uk/> (2025年1月19日閲覧)

ティバルを開催している。2024年のフェスティバル期間は5月3-16日で、デスカフェ、ここにいない友へ、死別ワークショップ、終活などのプログラムが並ぶ。フェスティバルの締めくくりに、「宗教間散歩」(Interfaith Walk)が実施された。宗教を異にするひとたちが連れ立って散歩するイベントだ。ノースフィールド・コミュニティ・パートナーシップも、これらのプログラムを共催している。

ここにいない友へ (To Absent Friends) というプログラムでは、参加者が写真など故人の遺品を持ち寄り、飲食を共にしながら、大切なひとの思い出を語る。デスカフェはカフェだけでなく、墓地で開催されることもある。過去には、今日が最期の日と思って踊る (踊り狂う?) 「デスディスコ」 (Death disco) が企画されたこともある。

NORTHFIELD NEIGHBOURHOOD NETWORK SCHEME
Partnership & Community Committee

NORTHFIELD Community Partnership

A Matter of Life & Death
Creating space to think and talk about death and dying

A Matter of Life and Death Festival is an annual festival promoting healthy and productive conversation about death and dying.
Have a look below to find out what events are happening locally in Northfield.

7th May 6:00PM - 7:30PM	Death Cafe: Are you Ready? Chas Mann Coffee Shop, 70 Kings Norton Green, B38 8RU Find out all you need to know about Wills and Power of Attorney. Join us and a local solicitor and ask those questions you need to know.	8th May 7:30PM	To absent Friends The Black Horse Pub, Bristol Rd 5, B31 2QT A small informal gathering where we share stories of loved ones who have died. Bring an object or maybe a photo to help you share a memory and we'll all share in a toast to absent friends.
8th May 10:00AM - 11:55AM	Bereavement Workshop Oldingley Hall, 18 Oldingley Rd, B31 3BS An inspired workshop helping you explore notions of loss and death.	10th May 10:00AM - 12:00PM	Getting your Things in Order Chatham Place, 100 Chatham Rd, Northfield, B31 2JW A talk and Q&A by Age UK about later life planning, wills & power of attorney. Join us to get all your questions answered.
11th May 11:00AM - 3:00PM	Life Cycle Northfield Community Garden, Sir Herbert Austin Way, B31 1PZ A drop in family event to help children understand the natural cycle of life and death.	13th May 2:00PM - 4:00PM	Coffins, Cake & Connection! St Chad Rubery Church, 160 New Rd, Rubery, B45 9JA An event where local citizens can drop in and find what support is in their community and where to go to find information about "end of life" care, funeral planning and support.

You can find out more on the Brum YODO website here:
<https://brumyodo.org.uk/matter-life-death/>



3人目の報告者ポール・キャンベル (Paul Campbell) はソーシャルワーカーとしての経験に基づいて、認知症とともに暮らすひとたちの現状と課題を共有してくれた。また市職員として、認知症に関するバーミンガムの施策を教えて

くれた。これらを踏まえて、彼はコンパッション都市憲章に言及した。コンパッション都市憲章では、コンパッションコミュニティが次のように描写される。

コンパッション都市とは、次のようなコミュニティのことである。そのコミュニティは、人生最大の試練といえる瞬間や経験に際して互いに助け合うこと、なかでも生命を脅かす病気や致命的な病気、慢性障害、フレイル、認知症、グリーフと死別、長期間にわたるケアの試練や負担を抱える人たちをケアすることを公に奨励し、促進し、支援し、賞賛する。地方自治体は、わたしたちのうちでもっとも虚弱で脆弱な人びとを対象に、質の高いサービスを維持・強化しようと奮闘しているが、これらの人びとは、虚弱と脆弱に関するわたしたちの日常的な経験から隔たった極限事例というわけではない。病気、死にゆくこと、死と喪失など深刻な個人的危機は、人生の歩みのうちで、わたしたちのだれにでも訪れうる。コンパッション都市は、この社会的事実を正視し、それに対応するコミュニティである。（参考資料 4, 293 頁）

認知症はここに登場するものの、13 の具体的項目では言及されない。それを踏まえてポールは、コンパッション都市憲章に認知症を包摂するという課題をあげた。これを受けて、同行した老年看護学研究者とポールを中心に、認知症をとり巻く英国と日本の現状と課題、政策をめぐって情報・意見交換が行われた。

なおスザンヌからは、ホームレスのひとたちに対するグリーフサポート活動について報告を聞く予定だったが、話が盛り上がり、時間を超過したため、残念ながら割愛することになった。

屋外へ移動し、ランチをとりながら、日本におけるコンパッションコミュニティの動向と報告者の取り組みを共有した。報告者は、松崎町での活動と CC 連絡会²³、設立準備中の団体コンパッション&ダイアログなどについて話した。また報告者が主宰する死生学カフェ²⁴は、デスクフ



²³ <https://www.facebook.com/groups/479050074803328/>（2025年1月19日閲覧）

²⁴ <https://www.facebook.com/shiseigakucafeshizuoka/>（2025年1月19日閲覧）併せて参考資料 2 と 3 を参照されたい。

エと異なるコンセプトとスタイルゆえに大きな関心を集め、多くの質問が寄せられた。

最後まで参加してくれたバーミンガムの仲間たちと別れを告げ、私たちはスザンヌとともに、マルティノ・ガーデンズ(Martineau Gardens)へ向かった。

マルティノ・ガーデンズは、バーミンガムでもっとも長い歴史をもつコミュニティガーデンのひとつである²⁵。1950年代に教員たちのためのセンターとして開設され、60年代には環境教育の一環として、子どもたちを招き入れる。90年代には、地域住民がコミュニティガーデンとして利用するようになる。2014年以降は、バーミンガム市議会の助成を受けて、園芸療法(therapeutic horticulture)のプログラムを導入している。なおマルティノ・ガーデンズという名称は、初期のパトロンの名前(Mollie Martineau)に由来する。



入場は無料で、だれにでも開かれている。家族連れで自然と親しんでもいいし、ペットを同伴してもいい。もちろんひとりで散歩に訪れてもいい。病むひとや障害のあるひとを訪れる。精神疾患を抱えるひとが多く訪れるという。また環境教育のプログラムが用意されているので、学校から生徒たちが頻繁に訪問する。あるいはボランティアとして、植物の世話をすることもできる。



敷地へ足を踏み入れると、手入れの行き届いた畑が並んでいる。各所にイスやベンチが配置されていて、ひとりで、あるいは家族や友人と、思い思いに過ごす

²⁵ <https://martineau-gardens.org.uk/> (2025年1月19日閲覧)

ことのできる場所になっている。周囲を森林に囲まれているため、木陰も多く、ひっそりとしている。「対話にもってこいの空間だ。こんなところで対話したいものだ」と考え、案内役のジェニ・フライヤー（Jenni Fryer）にそう伝えたところ、彼女もこの場所での対話を大切にしているという。



ジェニは以前、ホスピスに勤務していたが、マルティノ・ガーデンズの公募に応募し採用されて、現在はここでCEOを務めているという。ただし彼女以外のスタッフはすべてボランティアであり、ボランティア確保と資金調達に頭を悩ませているという。人間と自然のかわり、障害とともに生きること、対話の力について、時間を忘れて、二人で対話した。

この訪問を機に報告者は、自然環境に身をおきながら対話するという試みを看護学校や大学の授業に積極的に取り入れている。風を感じ、草木の薫りを嗅ぎ、ときに空を眺めながら、相手の語りに耳を傾ける。このようなスタイルで進められる対話は、屋内でのそれと、不思議と違って来る。主宰する死生学カフェでも、2025年は屋外での企画を導入することに決めた。このような対話実践を重ねたうえで、ふたたびマルティノ・ガーデンズを訪れ、ジェニと対話したいと願っている。

バーミンガムでの視察を通して学んだこと、考えたことを書きとめておこう。

第一に、大都市でもコンパッションコミュニティの形成は可能である。CC-UK 年次大会の交流会場で、アランは「コンパッションコミュニティの形成に都市のサイズは関係ない」と強調していた。それはなぜか。人びとの日常生活は基本的に、それぞれの地域で営まれているからだ。各地域には、子どもたちが通う学校はもとより、教会や寺社、病院や福祉施設がある。職場も近隣に位置するかもしれない。地区によっては美術館・アートセンターやホスピスも存在するだろう。これらコミュニティの拠点では、程度の差こそあれ、互いの健康・幸福がすでに気づかれている。コミュニティメンバーは、病や老いはもちろん、喪失や死ともけっして無縁ではないからだ。それに応じてそれぞれの地域には、コンパッションコミュニティの萌芽が見られるのだ。だとしたら残された課題は、それらの萌芽を育てることだ。まさにノースフィールド・コミュニティ・パートナーシップは、この目的のためにノースフィールドという地域で活動している。さらにブルムヨドや市議会、市内の大学と広く連携し、パートナーシップを築くことで、

互いに補いあい、サポート機能を強化しているのだ。

第二に、各人が直面する深刻な問題について話し、だれかに聴いてもらう機会や場所が欠かせない。ブレアトン・ラーベンヒルと対照的に、バーミンガムのコンパッションコミュニティでは、多種の死別サポートプログラムや死生をめぐる対話の場が用意されている。それだけニーズが大きいということだろう。

自身が健やかであり、コミュニティの絆が強ければ、喪失や死のサポートプログラムは必要ないかもしれない。そのような場合、ブレアトン・ラーベンヒルのようなコミュニティの拠点があれば、相互的なケア関係が築かれ、住民たちは課題を分かち合い、助け合うことができる。それは喪失と死の諸課題に共同で対処する足場ともなるだろう。

しかし喪失と死の諸課題に直面し、苦悩するとき、ひとは真剣に聴いてもらえ、安心して語れる場を慎重に選んで参加する。死別サポートプログラムや死生をめぐる対話の場は、まさにこのようなニーズに応えるものだ。それは静岡で死生学カフェを主宰しながら、報告者が痛感しているニーズでもある。

第三に、これと関連して、「コンパッション」と「対話」は不可分な関係にあり、それに応じて手を携えて歩む。ひとびとはコンパッションに駆られて、相手の語りに真剣に耳を傾ける。また対話を通してコンパッションを深めていく。バーミンガムのコンパッションコミュニティが提供する一連のプログラムは、そのことを裏書きしている。バーミンガムでの視察を通して、報告者は、設立準備中の団体の名称を「コンパッション&ダイアログ」と定めることに確信を抱くにいった。この名称は、団体の活動がコンパッションとダイアログを包摂し、両者のいずれも大切にするとすることを意味するだけでなく、コンパッションとダイアログは不可分であり、だからこそ共に育っていくことを表しているのだ。この洞察を日本の仲間たちと共有し、育てていけば、それは CC-UK とはひと味違った、CC-JP のオリジナリティになるだろう。

結語

今回の視察では、コミュニティホスピスを初めて訪問し、ホスピス運動の別の側面にふれるとともに、コンパッションコミュニティとの密接な関係を確認することができた。また CC-UK の年次大会に参加し、コンパッションコミュニティ運動のリーダーであるアラン・ケレハーとじっくり対話する機会に恵まれた。それを通して CC フェスティバルと東アジア CC ネットワークの構想を獲得することができた。さらに CC-UK 最初のコンパッションコミュニティ（ブレアトン・ラーベンヒル）とコンパッション都市（バーミンガム）では、志を同じくする仲間たちと出会い、これまで述べてきた通り、多くの貴重な学びを得るこ

とができた。マルティノ・ガーデンズというコミュニティの訪問は、自然と人間のかかわりについて再考する機会となった。私たちのためにプログラムを用意し、貴重な時間を費やしてくれた一人ひとりに、この場を借りて感謝の意を表したい。

末筆になるが、一般社団法人オレンジクロスからは、視察に要した渡航費等のご支援を受けた。寛大なご支援に、この場を借りて衷心から感謝申し上げたい。

参考資料

1. 動画「死と喪失を共に受けとめ、助け合って生きる～ヒロの物語」(静岡大学哲学研究室制作、6分)
https://www.youtube.com/watch?v=V_MYWhEH2Kc&t=49s
2. 『死とともに生きることを学ぶ 死すべきものたちの哲学』(竹之内裕文、ポラーノ出版、第2版、2023年)
3. 「死生を支え合うコミュニティの思想的拠り所 手がかりとしての『対話』と『コンパッション』」(竹之内裕文、『現代宗教 2022』所収、国際宗教研究所編、61-91頁、2022年)
<https://www.iisr.jp/journal/journal2022/>
4. 『コンパッション都市 公衆衛生と終末期ケアの融合』(アラン・ケレハー著、竹之内裕文・堀田聡子監訳、慶応義塾大学出版会、2023年、第2刷)
5. 「コンパッション都市の基礎理論 成熟した人間的共感としてのコンパッション」(竹之内裕文、『文化と哲学』第40号、2024年、1-18頁)
<https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/records/2000703>
6. 「対話を通して生と死を学び合う これからの死生学のために」、「喪失と死を共に受けとめ、助け合って生きる コンパッション都市・コミュニティという試み」(竹之内裕文、『エンドオブライフケア学 “自分らしく生きる” 哲学』所収、日本看護協会出版会、27-35頁、116-124頁、2024年)